



復活節第 4 主日 (ヨハネ 10:1-10)

イエスの声に聞き従う信徒に育つために

復活節第 4 主日の福音朗読箇所から、「羊は羊飼いの声を聞き分け、羊飼いについて行く」とまとめたいと思います。また、今週の福音朗読を補強するために、直前のヨハネ福音書第 9 章「生まれつき目の不自由な人のいやし」の物語にも触れたいと思います。

教区代表者会議の第一会期に参加してきました。わたしは会議の書記として呼ばれていたもので、会議で発言することはありませんでしたが、会議の流れを見守っておりました。真剣な討議がなされまして、これからあと 3 回、同じように会議を積み重ねていくこととなります。

教区代表者会議の雰囲気味わってきて、この会議がそもそもどんな会議だったのかを理解しました。この会議は、長崎教区が直面している危機感・停滞感を共有し、今手を打たないと手遅れになる問題点を見つけ出し、大司教に提言して「参加し・交わり・宣教する」長崎教区へ真の生まれ変わりを目指すものです。それは同時に、信徒発見から 150 年目を迎える来年に向けて、長崎教区が再出発をするふさわしい準備にもなる。わたしはそう理解しました。

この教区代表者会議に先立って、中央委員会が教区民へのアンケートを通してまとめた 12 の提言案が、「カトリック教報 5 月号」に掲載されています。この提言案については教区シノドスの代表者だけでなく、教区民皆が、目を通して問題点を共有してほしいと思います。

多方面にわたって問題点が指摘されているのですが、それらすべてに共通するのは、「今手を打たないと、手遅れになる問題だ」ということです。そしてわたしは、12 の提言案を突き詰めると、「イエス・キリストの呼びかけを自分のこととして受け止め、生活にあてはめることのできる神の民になること」これが長崎教区民すべてに求められている「今手を打たなければ、手遅れになる」問題ではないかなと思っています。

福音朗読に入りたいと思います。朗読の前半部分は、ファリサイ派の人々に話されたのですが、彼らはその話が何のことか分からなかったとあります。ファリサイ派の人々は律法の教師として、指導的立場にありました。ところが、イエスによると彼らは偽善者であり、民衆を父なる神のもとへ正しく導いてなかったのです。

イエスは民を父なる神のもとへ導くまことの羊飼いとして現れ、彼らよりたやすく聞き従うことができるように、模範を示し、先頭に立って歩かれます。

偽善者とまことの羊飼いとの違いは明らかで、民はイエスの声を聞き分け、ついて行きました。ファリサイ派の人々は自分たちがよもや盗人や強盗、偽の羊飼扱いされる存在だとは理解できなかつたのです。

「羊は羊飼いの声を聞き分ける」(10・3 参照)とあるのですが、それは具体的にはどのような姿を表しているのでしょうか。この説明のために、直前のヨハネ福音書第 9 章の物語が役に立ちます。そこでは生

まれつき目の不自由な人がイエスによっていやされました。そこへ事情を把握しようとファリサイ派の人々が来て、「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの人をどう思うのか」(9・17)と追及します。それに対して彼は「あの方は預言者です」と言いました。

さらに「あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです」(9・33)ときっぱり答えるのです。いやされたこの人は、自分を父である神のもとへ導くまことの羊飼いはイエスであると理解し、その声を聞き分け、従う人になっていました。

ファリサイ派の人々は、目が見えるようになった人の毅然とした態度に逆上します。「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」(9・34)と言いつ返し、彼を外に追い出しました。

「外に追い出した」とは、単に家の外に出したということだけでなく、共同体からの追放、日本語で言う「村八分」を意味していました。ユダヤ人たちは既に、イエスをメシアであると公に言い表す者がいれば、会堂から追放すると決めていたのです。

そんな圧力を受けても、いやされた人は屈することなく、イエスの声に従う道を選んだのでした。この、第9章で描かれた生まれつき目の不自由な人のいやしを前置きして考えると、今週の朗読個所の第10章は生き生きと読み取れると思います。

「羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているのだから、ついて行く。しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」(10・3-5)

羊が、まことの羊飼いの声を知っているという姿は、もう少し踏み込んで考えてよいかもしれません。イエスは、ご自分の命をパンとして割いてお与えになり、羊を養います。羊は、羊飼いであるイエスが十字架上で命をささげ、復活して豊かに命を与えることを知っています。知っているだけではなく、まことの羊飼いやイエスを愛しているのです。

わたしたちも、イエスの招きを自分のこととして受け止めましょう。生まれつき目の不自由な人がいやされて、「あの方は神から来られた方です」ときっぱり答え、イエスの声に従うことを表明しました。当時の雰囲気は、イエスを信じる者は村八分になることも覚悟しなければならなかったのです。そんな圧力にも屈せず、イエスを信じることに意味と価値を見出していると言いつ切りました。

わたしたちは、いやされたあの人と同じ信仰を言い表すことができるでしょうか。5月の連休から始まった「教区代表者会議」は、まさにこのような司祭・修道者・信徒が育たなければ、手遅れになると感じて、代表者を集めたのでした。「羊はその声を聞き分ける」「羊はその声を知っているのだから、ついて行く」わたしたちはイエスの呼びかけを、自分への呼びかけと受け止め、生活の中でどのように当てはめたらよいか考えようとしているのでしょうか。そのような司祭・修道者・信徒が長崎教区に育ってきたとき、代表者会議はその役割を終えるのだと思います。